

# 銭形平次捕物控

どんど焼

野村胡堂

青空文庫



「あ、あ、あ、あ、あ」

ガラツ八の八五郎は咽喉のどぼとけ佛のみえるやうな大欠伸おほあくびをしました。

「何と言ふ色氣のない顔をするんだ。縁先で遊んで居た白犬しろいぬが逃出したぢやないか、手前てまえに喰ひ付かれると思つたんだらう」

のんびりした春の陽ざしの中に、錢形平次も年始疲れの、少し奈良漬臭くなつた足腰を伸ばして、寢そべつたまゝ煙草けむりの烟の行方を眺めて居たのです。

「だがね、親分、正月も三ヶ日となると退屈だね。金は無し、遊び相手は無し、御用は無し、——そこで考へたんだが、二度年始廻りをする術てはないもんでせうか——明けましてお目出度う、おや八さん、昨日も年始に來たぢやないか、へエー、そんな筈はないんだが、あつしは暮から風邪かぜを引いて今日起き出したばかりですよ、それは多分八五郎の僞者でせう——なんて上り込む工夫はないものかな」

八五郎の イマジネーション 想 像 は、會話入りで際限もなく發展して行きます。

「馬鹿野郎、——よくもそんな間抜けな事が考へられたものだ」

「——それも樽たるを据ゑた家に限るね、一升買ひの酒ぢや、飲んでも身にならねえ」

「呆れた野郎だ」

「でなきア、御用始めに、眼の玉のでんぐり返るやうな捕物はないものかなア。親分の前めえだが、今年こそ、うんと働きますぜ。江戸中の悪黨が、八五郎の名を聞いただけで眼を廻す——てな事になると——」

「八、氣を付けるがいゝぜ、雪の無い正月で、いやにポカポカするから」

「ね、親分、今度はあつしに任せて下さいな、どんな事でも、一人で捌さばいて世間の人をア

ツと言はせますから」

「いゝ氣なものだ、——おや、さう言へば御用始めらしいぜ、手前逢つて見るか」

平次が隣室となりに隠れる間もありません。バタバタと入つて來たのは、若い男。

「錢形の親分さん、た、大變、——すぐお出で下さい」

突きのめされさうな聲です。二十五六、大店おほだなの手代風ですが、餘程面くらつたものと見えて、履物はきものも片かたちんば跛、着物の前もろくに合つて居りません。

「お前さんは、何處から來なすつたえ」

八五郎は精一杯の威儀ゐぎを作ります。

「安針町あんしんの、さ、相模屋さがみやから参めえりましたが、——わ、若旦那が昨夜——」

手代はゴクリと固唾を呑みました。

「これを飲んで少し落着いてから話すがいゝ。さうあわてちや却つて筋が通らねえ」

平次がぬるい茶を一杯くんで出すと、それを一と息に呑ほして、暫くホツと胸を撫でおろします。

「若旦那が何うした——」

と平次。

「昨夜殺されましたよ」

手代はぞつと身を顫はせます。

「昨夜殺されたと、何だつて今頃あわてゝ飛んで来るんだ。あの邊は第一、小網町こあみちやうの仙太の縄張ぢやないか」

ガラツ八は少しむくれて見せました。

「さう言ふな、八、——ね番頭さん、お前さんが下手人の疑ひを受けたんだらう」

「えッ、どうしてそれを、親分さん」

「昨夜の殺しを、今頃あわて、俺のところへ言つて來るのは、よく／＼困つたことがあるからだらう」

平次は落着いた調子で圖星を指します。

「小網町の親分が、——一人も外へ出ちやならねえ、世間の口へのぼる前に、下手人を捜し出すから——つて」

「仙太兄哥あにいのやりさうなことだ、——ところでどんな事になつて居るんだ、詳しく話して見るがい、次第によつちや、——お前めえさんが本當の無實なら力になつて上げないものでもない」

「有難う存じます、——私は相模屋の手代の與母吉よもきちと申しますが、災難は何處に轉がつて居るかわかりません。斯う言ふわけで——」

手代の與母吉は漸く落着いて話し始めました。

## 二

安針町の相模屋の若旦那の勘次郎は、正月二日の晩、離屋はなれのやうになつて居る別棟の二

階六疊の部屋で、小形の出刃ぼうちやう庖丁に喉笛を刺され、冷たくなつて居るのを、嫁のお清が見付け、大變な騒ぎになりましたが、小網町の仙太が駆け付け、内々けんし検屍だけを濟ませ、嚴重に口止めをしたまゝ、下手人の探索を續けて居るのでした。

勘次郎は二十三になつたばかり。日本橋業なりひら平と言はれた好い男で、隨分罪も作つた様子ですが、一年前に遠縁のお清を嫁に貰つてから、これが思ひの外の氣象者で、巧たくみに勘次郎の浮氣を封じ、大した噂もなく過して居りました。

「近頃は女出入では人に怨まれるやうな筋はございません。——そこで仙太親分は、若旦那と一緒に育つて、お清さんに思ひを掛けたことのある私が、怪しいと、睨みなすつたわけ——」

與母吉よもきちは泣き出しさうでした。

「それは、どんな御用聞でも考へる筋だ、——ところで、お前さんは今嫁のお清さんを何とも思つちや居ないのか」

平次は要領の搜さぐりを一本入れました。

「思はないわけぢや御座いませんが、主人の嫁ではどうにもなりません。お清さんが行儀見習で、相模屋に三年も居たんですから、昔思ひを掛けたのが怪しいと言へば、店中潔白

なのは一人もありません」

「成程な」

「尤も、三ヶ日は休みも同様で、昨夜店に居たのは私と小僧の寅松と二人切り、納屋の方には人足が二三人居たやうですが、これは棟が違ひますから、裏からこつそり入つて、若旦那を殺してそつと歸るわけには参りません」

「親旦那や、下女が居るだらう」

「御親類の方が年始に見えて、親旦那はそれを相手に、奥で飲んでいらつしやいました。夕方から酒が始まつて、お客の歸つたのは亥刻頃、——お清さんがそれから間もなく、若旦那の殺されて居るのを見付けたので御座います」

「奉公人は？」

「皆な出拂つて、店には私と寅松だけ、嫁のお清さんは客の相手で、お勝手には飯炊きのお熊どんと行儀見習に下田の取引先から來て居るお濱さんが、爛を付れたり、料理の世話をしたり、一寸の暇もなく立働いて居たさうでございます」

「殺された若旦那は、宵から二階などへ上がつて居たのか——此節は御觸がやかましくて、町家の二階では灯を點けてはならぬことになつて居る筈だが——」



萬治三年は正月から大火があつて、湯島から小網町まで焼き拂ひ、二月は人心不安の爲  
 將軍日光社參延引を令し、六月には大阪に雷震、火藥庫が爆發し、到頭江戸町家  
 の二階で紙燭、油火、蠟燭を禁じたのです。

「年始疲れと二日酔の氣味で、日暮前から離室の二階で休んで居ました」

「その離屋は、母屋の者に知れずに外から出入りが出来るかい」

「雨戸は西刻前に締めます。用心のやかましいお店ですから、外から離屋へ出入は出来ません」

「中に居る若旦那が開けてくれたら——」

「そんな事はございません、締りは内からしてありますし、若旦那は二階で殺されて居りました」

「母屋からは？」

「三尺の廊下で續いて居ります。土藏の前を通つて、これはわけもなく行けます」

與母吉の話で、大體の様子は判りますが、下手人の見當までは、錢形の平次でも付けやうがなかつたのです。

「八、——手前一人で行つて見るがいゝ、望み通り、眼の玉がでんぐり返るやうな話らし

いぜ」

「へエ——」

さう言はれて見ると、八五郎も少しばかり不安がないでもありません。

「親分は？」

與母吉は不安らしく平次を顧みました。あまり賢さうに見えないガラツ八にゆだ委ねるのが、何としても心配でならなかつたのでせう。

「俺が行つちや、仙太兄あにい哥に悪からう。八五郎で手に負へなくなるまでは顔を出したくない」

「——」

與母吉は押してとも言ひ兼ねた様子で、ガラツ八と一緒に、安針町の店へ歸つて行きました。

### 三

「番頭さん、何處へ行つたんだ、俺の言ふことを聴かなきア、繩ア付けて引立てなきアな

らないが——」

與母吉よもきちの顔を見ると、仙太は以ての外の様子で斯う極め付けました。その後から相模屋の敷居を跨またいだガラツ八は、厭も應もなく、それと顔を合せて了つたのです。

「小網町の親分、——これはあつしのせゐだ、勘辨しておくんなさい」

「おや、錢形親分のところの、八五郎兄哥あにいか。大層鼻が良いやうだが——」

仙太は苦り切ります。

「ツイ日本橋に用事があつて來ると、其處で與母吉さんに逢つてネ、——なアに、前から少しばかり知つて居るんだ、——大層顔色が悪いから、何うしたのかと訊くと、斯うく

——

八五郎もなか／＼うまい事を言ふやうになりました。

「うまく言ふぜ——まあいゝ。どうせ錢形の兄哥にも來て貰はうかと思つて居るところだ。差し當り一の子分の八五郎兄哥の見込を聽かして貰はうぢやないか、近頃は大した評判だぜ」

仙太は日本橋界限を繩張にして居りますが、向う息の荒い割には氣の良い男で、平次の腕には、及びも付かぬことをよく知つて居たのです。

「それほどでもないが」

ガラツ八は長い頤あごを撫でます。

店には二三人の番頭が居りますが、それは昨夜の事件とは関係のない者ばかり、宵の行先は仙太の手で調べて、一人残らず解つて居りますが、さすがに恐ろしい事件の壓迫感あつぱくかんで、青白く緊張した顔を見合せて、言葉少なに慎しんで居ります。

「飛んだ事でしたね、旦那」

奥で火鉢に頤を埋めるやうに、深々と思案に暮れて居るのは、主人の勘兵衛でした。まだ五十五六の働き者ですが、親一人子一人の伴を喪つてうしな、さすがにがっかりして居ります。

「有難う御座います、——御苦勞様で——」

「下手人の心當りはありませんか」

「それがあれば宜しいでせうが——何分私は二た刻もお客の相手をして居ましたんで——」  
ガラツ八の恐ろしい愚問に舌を巻き乍らも、商人らしく、勘兵衛は素直に相槌あひづちを打ちます。

小僧の寅松は庭を掃いて居りましたが、これはやつと十二、人を殺す年でも柄でもありません。

「あれがお清さんとか言ふ？」

お勝手から出て来た若くて美しい女を、薄暗がりの中にガラツ八は指しました。

「いえ、お濱と言つて、行儀見習に下田の取引先から来て居る娘ですよ」

勘兵衛は訂正ていせいしてくれます。さう言へば、美しさも、身みなり分の整つて居るにも拘かゝらず、眉も齒も、娘姿に間違ひはありません。

「下田から——？ 何時頃から来て居なさるんで」

「半歳ほど前でした、——十九の厄やくで、年を越さないうちは嫁にもやれないから、暫らく江戸の水を吞ましてくれといふ親元の頼みでしたな」

勘兵衛はさう説明して居るうちに、お濱は自分の噂に追はれて身を細らせ乍ら、奥の方へ消えます。さう言へば、心持野暮つたいところはありますが、如何にも健康さうで、ハチ切れさうな美しい娘です。

「あれは間違ひもなくお熊さんでせう」

お勝手に居る四十恰かつかう好のお熊さん——耳の少し遠いのをガラツ八はのぞくやうにしました。

「もう十年も奉公して居ります、家の者も同様の女で——」

「お熊さん、昨夜離屋の二階へ行つた人は誰と誰だい」

ガラツ八は尤もらしく訊ねました。

「御新造さんと、お濱さんが一度づつ行つたやうですよ。御新造さんは西刻むつはん半頃様子を見に行つて、若旦那様が頭痛がすると仰しやるんで、窓を明けて來なすつたとかで、それから半刻ばかり經つて、お濱さんが閉めに行きましたよ」

「二階の窓が開いて居たのか？」

「開いて居たつて曲者の入れる氣遣ひはないぜ、梯子はしごがあるなら知らず」

仙太はガラツ八の間抜けさを笑つて居る様子です。

「梯子を持つて來て掛けたとしたら？」

「二階を見てからそんな事を言つた方がいゝよ。梯子なんか持つて入られる場所ぢやねえ、それに、雨戸はお濱さんが閉めて來たんだ、その時まで若旦那はピンピンして居たんだぜ」  
さう言はれると一句もありません。

「お濱さんが——」

ガラツ八はまだ腑に落ちないものがある様子ですが、

「お濱さんが一應疑はれるわけさ、が、正面から喉のどぶえ笛へ突き立てた出刃が、後ろへ突き

抜けるほど深く刺してあるんだぜ、全く恐ろしい力だ。誰が見たって、女や子供の手際とは思はないよ、——まさか、咽喉笛へ出刃を當てさしてよ、槌つちで叩かせる者もあるめえ」  
 「成程ね」

仙太の話を聞くと、お濱には少しの疑ひも掛けて居ません。

「それに、正面からあれだけの事をやつて、返り血を浴びない筈はない、——お濱の着物は残らず見たが、汚しみ点一つないよ」

最後の止めを刺され乍ら、ガラツ八は離屋はなれに向ひました。納戸の前から、土藏の前を通つて、三尺の廊下の盡きるところに、離屋の二階の登り口が開きます。

上には親類の年寄が二三人と、嫁のお清が、まだ入にふくわん棺も濟まぬ死骸の前に、濕しめつぽく坐つて引つ切りなしに線香を上げて居るのでした。

「御骨折で——有難う存じます」

お清はふり返つてガラツ八に挨拶しました。二十歳はたちと言ふにしては少しふけて居りますが、拔群のきりやうで、身體のひ弱さと反對に、氣象はすぐれて居るらしく、此騒ぎの中にも、一番取亂した様子はありません。

「飛んだ事ですね、——昨夜、一番後で逢つた時は、どんな様子でした」

とガラツ八。

「寝<sup>やす</sup>んで居りましたが、——私が行くと眼を覺して、少し頭痛がするから、窓を明けてくれと申しました」

言葉少なに、窓を指します。

敷居に飛沫<sup>しぶ</sup>いた血潮は、大方拭き取つたやうですが、まだ生々<sup>なまく</sup>しく残つて、何となくぞつとさせます。

窓の外は四間ばかりの空地を隔<sup>へだ</sup>て、乾物<sup>かんぶつ</sup>を積んで置く納屋の二階に面して居りますが、左右の木戸が狭いのと、空地一杯に商賣用のガラクタで、三間梯子などを持ち込めないのは、たつた一眼でわかります。その上窓の下は切立てたやうな壁で、這ひ上がるたよりもありません。

曲者が窓から入つたのでないことは、お濱の證言がなくとも、あまりに明<sup>あき</sup>かです。

「この通りだ、見てくれ、八兄<sup>あにい</sup>哥」

仙太は線香を一本上げると、片手拜みに近付いて、死體の上の白布を取りました。

「ウ——ム」

ガラツ八が唸つたのも無理はありません。恐怖<sup>ゆが</sup>に歪んだ勘次郎の死顔は、男が好いだけ



に一きは物凄く、少し左に寄つた頸筋は、細目の出刃に割かれて、凄まじい口を開いて居るのです。

「どうだ、女や子供の力ではあるまい」

仙太はさう言ひ乍らお清の顔を見ました。

「出刃庖丁はどうしたんだ」

「此處にあるよ」

「どれ」

白い晒木綿さらしもめんに包んだのは、何處のお勝手にもあると言ふものではなく、時々は刺身さしみ庖丁うちやうの代りにもなつたらしい、細作りの出刃で、血に染んで慘憺たる色をして居りますが、よく砥ぎ澄とましたものらしく、紫色にギラギラと光つて居ります。

「どうだい八兄哥、これぢや昨夜戌刻いっくから亥刻よつ（八時から十時）まで此家に居た者で、人の頸くびへ正面から三寸も出刃を突き立てる力のある者が怪しいといふことになるだらう」

「その通りだ」

仙太とガラツ八は、離屋を引揚げて、土藏の前から、空地へ降りて來ました。

「親旦那は伴を殺すわけではないし、小僧の寅松は十二だ。客は酔つて居たし、一度も席を

立たないとすると、何うだ八兄哥、手代の與母吉があやしくなるだらう。あの野郎は嫁のお清が此店へ行儀見習で來て居る時から夢中だつたんだ」

仙太に言はれて見ると、ガラツ八もツイそんな氣になります。

「さうかも知れない——が、序ついでに奉公人達に逢つて見よう」

「初荷の仕事はあつたが、手燭がうるさいから、夜業はしねえ、——昨夜納屋に來たのは、仁助と吉三郎の二人つ切りだ」

「そいつに逢つて見よう」

「足止めをしてあるから、來るがいゝ」

二人は其儘納屋へ入つて行きました。納屋と言つても、乾物の荷物を扱ふ定雇ひの人数が二人三人は泊まれるやうになつて居るので、裏の方には二疊ほどの部屋を取つて、寢道具もひと通りは揃へてあります。

「へエ——、昨夜此處に居たのは、私と、この吉三郎だけで——、朝から飲み續けて、日の暮れる頃はもう高たかい軒びきでした、何にも存じませんよ」

信州者だといふ仁助は三十二三、如何にも酒好きらしい、一と癖も二た癖もある緒ら顔の男です。

「二人共外へは出ないんだね」

「亥刻過ぎに、御新造さんの聲で眼を覺しました、——何しろ大變な騒ぎで——」

吉三郎は少しおろ／＼して居ります。相模者だといふ、これは二十三四の平凡な男です。

仙太とガラツ八は二人に案内さして、乾物臭い納屋の二階に登りましたが、勘次郎の殺された部屋とは四間餘り隔て、此處からは鐵砲でなければ、人一人を殺せる道理はありません。

#### 四

「親分、こんな事だ、——まるで見當が付かねえ」

ガラツ八の八五郎は、それから半刻も経たないうちに歸つて來ました。

「一人で捌いて、世間をアツと言はせる筈だつたぢやないか、遠慮することはないよ」  
平次は意地悪く動かうともしません。

「そんな事を言はずに、ちよいと行つてやつて下さいよ、——仙太兄哥は、與母吉を縛つ

て了ひましたよ」

「俺が行つたところで、それより解る道理はない、誰か下手人を庇かばつて居るんだ」

「へエ——、そんな事がどうして解るんで」

「テニヲハの合はない殺しがあつたら、さう思へ。與母吉でなきア、女三人のうち、誰か下手人を知つて居るに違げえねえ」

「だから行つて見て下さいな」

「厄介な野郎だ、そんな事ぢや、何時まで経つても、一人立ちは出来ないぜ」

「へエ——」

叱られ乍らもガラツ八は、いそぐと先に立ちました。

相模屋へ着いたのはもう夕刻、大きな門松を潜つて入ると、中は御通夜おつやの支度で、勘次郎の死體を階下したに移し、晝來た時とは打つて變つて賑やかになつて居ります。

「親分、旦那に逢ひますか」

「いや、納屋と外廻りを先に見よう」

平次は店口から直ぐ裏へ廻つて、勘次郎の殺された部屋の下へ立つて見ましたが、ガラツ八が説明した通り、此處からは梯子はしごがなければ二階へ入る方法はなく、梯子があつたと

ところで、狭い木戸や土藏の間を、人に知られずに持ち込む工夫はありません。

「お」

「親分、血ぢやありませんか」

「さうだよ、だから明るいうちに外廻りを見ようと云つたんだ」

窓の下に置いた乾物の俵の端つこに、ほんの二三點、飛沫しぶいたやうに黒くなつて居るのは、馴れた者の眼から見れば、紛れもなく血の跡です。

「此店こゝぢや生なま物は扱はないだらうな」

「そりや親分」

言ふだけ野暮で、相模屋は聞えた乾物問屋ですから、血の滴したるやうな魚を扱ふ道理はありません。

「その邊を丁寧ていねいに探して見な、何かあるかも知れない」

平次に言はれると、八五郎は馴れた獵犬のやうに、眼の及ぶ限りを捜し廻りましたが、それつきり、あとは何んの變つたものもなかつたのです。

納屋へ入ると、仁助と吉三郎は足止めを喰つて、すっかり悄氣しよげ返つて居ります。

「正月の三日ですよ、親分、足止めは殺せつ生しやうぢやありませんか」

さう言ふ吉三郎が、若くて遊び好きさうに見えるのも不憫ふびんです。

「まア、長い事はない、辛抱するがいゝ、ところで二階へ行つて見るが、二人共一緒に來て貰はうか」

「へエ——」

平次はガラツ八と仁助と吉三郎を従へて、ガタピシする梯子を踏んで二階へ登りました。  
「成程、此處からは手が届かない」

窓を開くと、勘次郎の殺された部屋までは四間あまり、此處から向うへ届くやうな踏板もなく、先づ綱でも張つて、輕業かるわざの太夫でも伴れて來なければ、向うへ渡る見込みはありません。

「親分、母屋おもやへ行きませう」

ガラツ八は、平次の落着拂つた様子が不思議でならなかつたのです。

「まア急くな、——とところで、二人のうち綱渡りの出来るのはないだらうな」

「冗談で、親分」

「冗談ぢやないよ、綱を張つて渡る工夫が出来れば、向うの窓へ樂に行ける」

平次は日本一の眞顔でした。

「あつしは獵師の眞似をしたこともありますから、鐵砲なら撃てますが、綱渡りなんて藝はありません、——吉三郎は魚取りの方で、相模灣で波の上は渡つたでせうが、これも綱を渡つた話は聞きませんよ」

仁助は少し向つ腹を立てた様子です。

「獸や魚を相手に暮したら、刃物を抛ることもあるだらうな」

「そりやありますとも」

「手鎗とか、銚もりとかを——」

平次の調子は滑かです。

「出刃庖丁は抛りませんよ」

仁助は恐ろしくきかん氣です。

「猪いのしまぐろや鮪へ出刃庖丁を抛つた話は聞かないな、ハツハツハツ」

平次はカラカラと笑ひました。

「手槍がありや抛つてお目にかけますぜ、猪や熊だつて一と突きだ、人間なんざ甘めえもんで」

仁助が又ケ又ケとそんな事を言ふと、

「兄哥、餘計なことは言はない方がいゝぜ、俺だつて、銚もりなら抛るが」  
吉三郎はニヤリニヤリして居ります。

## 五

家へ入つて、ガラツ八がやつたやうに一人々々當つて見ましたが、別に變つた手掛りはありません。

離れの二階へ行くと、もう薄暗くなりましたが、それでも、窓から疊の上へ、まぎくと血の痕あとが残つて居ります。

「拭かなきやアよかつたなア」

平次は窓のあたりを覗いて居りましたが、やがて雨戸と障子を閉めて、薄明りの中からすかしてをります。

「八、これに氣が付かなかつたか」

「何です、親分」

「障子にも雨戸にも血が着いてゐない」



「成程」

「窓の下の空地には血飛沫ちしぶきがあるだらう」

「――」

「勘次郎が殺された時は、窓が開いて居たんだ」

「それはどう言ふことになるでせう、親分」

「それから、寝て居てやられたんではない、立つて居るところをやられたに違ひない」

「――」

窓に掛つた血から判断すると、それ位のことは直ぐ判る筈なのに、――ガラツ八は凡そ酔よばい顔かほをしました。

「お清さんと呼んで来てくれ、それから、お清さんが済んだら、お濱を呼ぶんだ」

「へエ――」

ガラツ八は母屋へ行つて、間もなくお清を呼んで來ました。が、その時はもうすっかり暮れて、お互の顔もはつきり判りません。

「灯りを持つて参りませうか」

「いや、二階の灯あかりは御法度だ、――それはいゝが、お清さん、こんな事は訊きにくいが、

勘次郎さんに近頃親しい女はなかつたのかね」

「——」

「隠さずに言つて貰ひたいが——」

お清は暫らく躊躇ちゅうちよして居りましたが、やがて思ひ定めた様子で、

「お濱が、——あの」

「そんな事ではないかと思つたよ、——」

「これは内證にして置いて下さいませんか」

「いゝとも。ところで、——昨夜お濱は幾度此處へ來たか、——お前さんは知らない筈はないと思ふが、——」

自分の夫と變な素振のある女の舉動を、お清が見のがす筈はありません。

「一度——戾刻いっく過ぎに來たやうでした」

「長く二階に居た様子はなかつたらうか」

「え、ほんのちよいとで」

「様子は」

「落着いては居りましたが、青い顔をして居たやうな氣がします」

「その後で何か粗忽そこつをしなかつたらうか」

「氣丈な娘ですから、尤もちよつと外へ出て風に吹かれたやうでしたが」

人一人を殺せば、茶碗を落すとか、物を轉がすとか、何か一つ位は粗忽をするだらうと思つたのでせう。平次の考へさうな事でした。

「外に氣の付いたことは？」

「何にも御座いません」

「どうも有難う——だんく判つて來るやうな氣がする」

お清が下へ降りて行くと、入れ違ひにお濱が昇つて來ました。

お清の智的な美しさに比べて、健康さうな多血質なお濱は、別種の美しさを持つた娘で、氣の多い勘次郎に附け廻されたのは無理のないことでした。

「お濱さん、大分若旦那したと親したしかつたさうだが、昨夜、何か混み入つた話をしたのかい」  
平次は齒きぬに衣着きぬせずに浴びせかけます。

「いえ、——御新造さんが、そんな事を言ふんでせう」

「お前は、もう少しいろくの事を知つてる筈だ、——第一、あの庖丁は誰のだ」

「知りませんよ」

「江戸では滅多に見かけない形だが——」

「——」  
妙な睨み合ひ、——空氣は次第に硬張るばかりです。

「ね、お濱、——お前は下田の生れだと言つたが、吉三郎を知つて居るかい」

「いえ」

「吉三郎は相模者で、お前は伊豆——海一つ向うだな、——番頭の與母吉は何うだ。ちよ  
いちよいお前を附け廻したと言ふではないか」

「いえ、與母吉さんは御新造さんの方で——」

「仁助は？」

「——」

お濱はそれつ切り口を嚙つぐんで了ひました。

「親分、娘は苦手だね」

ガラツ八は、階下へ降りて行くお濱の後姿を見送つて斯んな事を言ひます。

「俺はさう思はないよ、娘は正直だ、口で言はなくたって、顔色が物を言ふ」

「成程ね、——ところで親分、この窓から帯でも下げて、男を引上げる事がむづかしいで

せうか」

「誰が」

「お清さんか、お濱だ」

「それを勘次郎が黙つて見て居るのか」

「でも、納屋の二階から庖丁を投げるよりは確かですぜ」

「下らない事を言ふ」

二人はそれつ切り下へ降りて行きました。

## 六

錢形平次はガラツ八を伴れて、それつ切り引揚げ、二三日は様子を見る氣で居りました。後は小網町の仙太と、その子分共が詰め切つて、鵜の目鷹の目で見張つて居ります。

小網町の仙太は、大童おほわらわでした。勘次郎が昔關係した女と、その女達を繞る男を、虱しらみ潰つぶしに擧げましたが、何分古いことで、本人達が勘次郎の存在を忘れて居るのと、お清が思ひの外確しつり者で、近頃すっかり堅くなつて居たので、此方面には何の手掛りもなかつ

たのです。

「親分、妙なことを聞込みましたよ」

ガラツ八がさう言つて來たのはそれから四五日経つてからでした。

「何だ、八」

「吉三郎が十四日に暇ひまを取つて歸るさうですよ」

「十四日とは何う言ふわけだ、出代でがはり季節ぢやあるまい」

「田舎の小正月に間に合せるんですつて」

「それつ切りか」

「それから、嫁のお清さんが、錢形の親分さんに、——妙なものを見付けたから、お目にかけた——といつて居ましたよ」

「フーム、それは耳寄りだ」

平次はその足で直ぐ相模屋へ行つたことは言ふ迄ありません。

「あら、親分さん、——」

お清はいそくと藏くらへ案内すると、

「お濱が妙なものを隠して居るんですよ」

押入を開けて、隅つこの方を指します。

「何だ、箱はこまくら枕まくらぢやないか」

取出したのは朱塗の女枕、至つて古いもので、抽斗ひきだしもなにもありません。横の穴から覗いて見ると、中に一本の紐が――

「あッ」

引出して見ると、血に染んで黒ずんだ眞田紐が、膠にかはが中から引上げたやうに、ベツトリ疊の上へ這ひます。

「これは何に使つた紐だらう」

「前掛の紐ですよ」

「男物のやうだが、――心當りは？」

「――」

お清は言はうか止さうか、餘程迷つて居る様子です。

「それを言つて貰はなきや、何にもならない。尤も、お熊か寅松に訊けば解ることだが」

「申します、――どうも、與母吉よもぎちの前掛の紐のやうで」

「何？ 與母吉？」

これは平次にも豫想外でした。

「その眞田紐は古い品で、滅多にはありません」

「どうしてお濱が此藏の中へ隠したと解りなすつた？」

「ちよい／＼覗いて居ますよ」

「フム」

お清の答は簡単ですが、至極明らかです。

「八、お濱を呼んでくれ」

「へエ——」

出て行つた八五郎、暫らくすると疾風しつぷうのやうにスツ飛んで來ました。

「親分、た、大變、お濱が見えません」

「何？ お濱が居ない？ 惜しいところで逃げられたか」

それから又一と騒ぎが始まりましたが、用事を言ひ付けられたやうな顔をして、表口から堂々と出て行つたお濱を、仙太の子分もツイ見逃して了つたのです。



翌日、寢込んで居る平次は、思ひも寄らぬ客に起されました。

「親分、大變な者が來ましたよ」

ガラツ八は敷居の外から、帆ほつ立て尻じりになつて、部屋の中を覗いて居ります。

「何だ、松の内から、借金取でもあるまい」

「そんな氣障きざなもんぢやありません、お濱が來ましたよ」

「何？ 相模屋のお濱が、逃すなツ」

平次は飛起きると、ろくに顔も洗はずに、お濱を案内させました。

「親分さん、飛んだお騒がせしました。若旦那を殺したのは私で御座います」

お濱は一ひと晩寢ばんねなかつたらしい顔を擧げて、斯う言ひ切切のです。

「何を言ふんだ、そんな事を聴くなら、早起をするものか、本當の事を言つてくれ」

平次は相手にもしません。

「これが本當の事ですよ、親分さん、私を縛しばつて突出して下さい——」

「それぢや訊きくが、何だつて若旦那を殺す氣になつたんだ」

「あの晩二階へ上がつて、雨戸を閉めようとすると、私をつかまへて、厭な事を仰しやる

んです」

「それだけか」

「――」

「なんだつて大きな聲を出さないんだ」

「御新造ごしんぞさんがいや味を言ひます」

「それなら、まあ、お前の言ふ事を本當にしよう。が、刃物は何處から出した、――若旦那が口説くどくだらうと思つて、出刃庖丁を用意して行つたのか」

「――」

「與母吉の前掛の紐は何處から出したんだ」

「――」

「サアサア、そんなつまらない事を言はずに歸るがいゝ。相模屋では大變心配して居るぜ。唯の奉公人と違つて、下田の親元へ濟まないつて――、一人で歸るのが極りが悪きア、俺が送つてやらう」

平次はガラツ八と一緒に、お濱を相模屋へ送つて行きましたが、何か、新しい暗示ヒントを得たものか、もう一度家の中から納屋まで、ガラツ八を手傳はせて、洗ひざらひ探し抜きま

した。

が、何にもありません。

「八、又見當が違つたぞ」

「何を捜すんで、親分」

「前掛と——もう一つは言はない方がいゝ」

「前掛なら前掛と言へばいゝのに——これでせう、親分」

「あ、それだゝ、何處にあつた」

「母屋おもやの押入ですよ」

「お濱かみりの行李の中か」

「親分はどうしてそれを？」

「まさかと思つたよ」

平次はそれつきり、お濱のことを主人の勘兵衛に頼んで歸りました。

與母吉は拷問がうもんにまで掛けられて居ると聴きましたが、頑固ぐわんこに口を噤つぶんで白状せず、事件はそれつ切り足踏みをして、正月十五日になつたのです。

## 八

「今日はどんどだね」（一に左義長、門松や書初めや、いろ／＼正月の物を焼く儀式）

「今年は火の用心の御布令おふれがあつて、江戸の町ではどんど焼が御法度ださうですよ」

ガラツ八は忌々いまくしさうでした。一つでも年中行事の減つて行くのが、江戸つ子には淋しいことだつたのです。

「相模屋の吉三郎が、昨日歸る筈だつたが、何うした」

「仙太が止めたさうです」

「——行つて見よう、少し心當りがあるやうだ」

平次とガラツ八は直ぐ安針町へ。

「おや、大變な煙だが」

裏口から入ると、平次は直ぐ氣が付きます。

「どんどが御法度で、町内で焚火たきびが出来ないと言ふ話で、門松の始末に困つて、風呂場で焚いて居ますよ」

主人の勘兵衛がこんな事を言ひます。

「お店なんか大きな門松を建てるから、こんな時は不自由なわけで」

「へエ——」

「門松は誰が焼いてゐるんです」

「お濱ですよ、女のくせに、妙な事に気が付いたもんで」

「あツ、それだツ」

平次は何に驚いたか、一足飛に風呂場へ——。

「あ、親分さん」

サツと顔色を變へて立上るお濱の手から、一と抱かゝへの松と竹を奪ひ取りました。

「八、納屋なやへ行つて吉三郎を縛れ」

「合點」

飛んで行く八五郎を尻目に、平次の片手は女を押へ、片手を働かせて門松の束たばをほぐしました。

中から選り出したのは、枝のない竹が一本、長さ六尺ほど、尖端さきは泥に塗れて、黒ずんだ膠にかはのやうに見えるのは、紛れもない血の古くなつたものです。

「これだく、どうして、こんな見え透すいた事に気が付かなかつたらう」

「親分、——吉三郎は逃げて了りましたよ」

八五郎は此時空手でボンヤリ歸つて來ました。

「薄情な野郎だ、女を捨て、行きやがつて——」

× × ×

お濱は危ふく處しよけい刑けいされるのを、平次の情で助られました。吉三郎はそれつきり行方知れずになりましたが、間もなく平次の手で捕まつて獄門臺ごくもんだいに登つたといふことです。お蔭かげであんなに庇かばつたお濱も、吉三郎に未練がなくなつたことでせう。

「親分、あつしには薩張さつぱりわからねえ、あれは一體どうした事で？」

ガラツ八が繪解をせがんだのは、それから大分經つてからでした。

「吉三郎は相模者だと言つたが、實は下田の者さ。お濱に懸想けさうして江戸へ追つかけて來たが、お濱も滿更でなかつたんだらう、何べんも助けようとした位だから」

「勘次郎を殺したのは？」

「あの晩、お濱が、雨戸をしめに二階へ行くと、若旦那の勘次郎が手籠ていめにしようとしたんだ。大きな聲を出すわけにも行かず、揉み合つて居ると、豫かねて勘次郎を狙つて居た吉三郎が、納屋の二階から見て、荷造に使ふ青竹へ、出刃庖丁を括り付け、投げ鉞もりの呼吸で向う

の二階へ抛つたんだ。竹へ庖丁を縛つた前掛は、與母吉が納屋へ忘れて行つたのから、紐だけ取つたのさ」

「そんな事が出来るでせうか、親分」

「三崎や下田には投鉞の名人が居るよ、十間も二十間も離れたところから、岩鯛いはだひの眼を貫くと言ふ手練だ、——血染の紐が見付かつて、吉三郎の仕業だらうと大方の見當は付いたが、庖丁を括り付けた竹が見付かる迄、縛るわけには行かなかつたよ、——その竹をお濱が門松へ突つ込んだとは氣が付くまい」

「へエ、——前掛がお濱の荷物から出たのは？」

「お清の嫉妬やきもちさ、納屋であれを見付けて、お濱の行李かうりへ入れたんだ、惡氣ぢやあるまいが、少し罪が深い」

「お濱はどんな氣で吉三郎を庇かばつたんでせう」

「自分の爲に人まで害あやめたからさ。娘心は不思議なものだ、投鉞から紐を解いて、竿さだけ窓から捨て、翌る日門松へ隠し、紐は藏の中へ入れたのさ、——それにしちや、逃出した吉三郎は薄情だ」

「成るほどね」

「尤もなまじつか、未練を残すより、その方がよからう。——だが、人殺しに門松を使つたのは俺も始めて見たぜ、これは誰だつて驚く」

平次はつく／＼さう言ふのでした。



## 青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第九巻 幻の民五郎」同光社磯部書房

1953（昭和28）年7月20日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1936（昭和11）年1月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2014年3月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 銭形平次捕物控

## どんど焼

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>